り給ひてむ。（明石姫君）女御の君も、いとあはれになむ思し出でつつ聞え
させ給ふめる。院（源氏）も、事のついでに・、『・もし世の中思ふやうな
らば、ゆゆしきかねごとなれど、尼君その程までながらへ給は
なむ』と宣ふめりき。（若宮もお生れになった事故とんなに待遠しがつていらつしやるでせう）いかにおぼす事にかあらむ」と宣へば、
（尼君が又うちゑみて、）「いでや、さればこそさま〴〵ためしなき宿世
にこそ侍れ」とて喜ぶ。（人道からの貴箱は明石上が携へて姫君の所へ奉られた）この文箱は持たせてまうのぼり給ひぬ。
（源氏は或は若宮の御即位を考へて仰しやるのかの意）

もし世の中　もし若宮が春宮にお立ちになるならば、其爲には御代が改まらなければならないので不吉な錄言ですが、その頃まで尼君も達者でいらつしやるやうに。

さればこそさま〴〵　それだから悲しみも喜びもそれ〴〵他に類のない運命なのです。

宮より疾く　春宮から明石女御に早く來られるやうにとのお召があるので。

御息所は　明石女御は容易にお暇の出ないのに憑りて、かういふ機會にもう暫く里に居りたく思召す。皇子をお生みになつた方を御息所と申す。

斯くためらひがたく　「かく」は「宮より疾く參り給ふべき云々」を指していふ。こんなに御催促があつて、じっともして居られないで（いそがしい）御身だから、此の際養生して參內なさるがよからう。

思ふさまにかなひ果て　思ひ通りに中宮におなりなさる迄はお目にかけずにおくべきですが、世は無常なものですから氣がかり故今お目にかけます。

何毒をも　萬事をあなたの御一存で處理し得るやうになられる前に私が死にでも致しますれば臨終の折に必ずしもお目に懸られる身でもございませんから、まだ正念で居ります間に些細な事もお耳に入れておかねばならぬと存じまして、見苦しい下手な筆蹟ですが、これも御覽下さい。

このうちの事どもは　この願文に書いてある願解きは果して下さい。かばかりと　あなたの將來も見屆けた事ですから。

え給ふを、（源氏）おとどは、「かやうに面痩せて（秦宮に）見え奉り給はむも、（却つて同情を引くものですか）かへ〴〵あはれなるべきわざなり」など宣ふ。（紫上などが自分の御殿に迎られた夕方）對の上などの渡り給ひぬる夕つがた、（人少な折に）しめやかなるに、（明石上）御方、（姫君のお側に）お前に參り給ひて、（入道からの貴箱）この文箱聞え知らせ給ふ。（明石上）「思ふさまにかなひ果てさせ給ふまでは、（この文箱を）取隱して置きて侍るべけれど、世の中定めがたければ、うしろめたさになむ。何事をも、御心とおぼし數まへざらむこなた、ともかくもはかなくなり侍りなば、必ずしも今はの閉ぢめを御覽ぜらるべき身にも侍らねば、（うつしごころ目の玉の黒いうちに）なほ現心失せず侍る世になむ、はかなき事をも聞えさせおくべく侍りけると、思ひ侍りて、（入道の女の事）むつかしく怪しき跡なれど、これも御覽ぜよ。この御ぐわんもん（ぶみ）は、近き御厨子などに置かせ給ひて、必ずさるべからむ折に御覽じて、このうちの事どもはせさせ給へ。疎き人にはな漏らさせ給ひそ。かばかりと見奉りおきつれば、（明石上も）みづからも、世を背きはべりなむと思う給へなりゆけば、よろづ心のどかに（氣ぜはしく思はれます）

いとありがたく　世にも珍しい御深切の程も分りましたから、私よりもずつと長生きして戴きたいと思ひます。

もとより御身に　私はもと〳〵あなたにお附添申して居るのも掛念せねばならぬ身分なのですから、あなたの事は一切紫上にお任せ申しておいたのですが、最初は世間並に考へて居りましてこれ程までには深切にして下さるまいと思つて居りました。今はもう全く安心致しました。

斯く瞻まじかるべき　明石上は斯く睦まじくあるべき筈の貴の願のお前に於ても始終長まつてゐて、無闇に遠慮がちの體である。

この文の言葉　入道の手紙の文言はいやに堅苦しくなつかしみのないものであるが、それをまた（やぼな）陸奥紙の古くなつて黄ばんだ厚ぼつたいの五六枚に書いてあるが、さすが香だけは深く薫きしめて書いてある。

も覺え侍らず。紫上の御思を　對の上の御心、おろかに思ひ聞えさせ給ふな。いとありがたくものし給ふ深き御紫上の氣色を見侍れば、身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなむとぞ思ひ侍る。もとより御身に添ひ聞えさせむにつけても、つつましき身の程に侍れば、讓り聞えそめ侍りにしを、いと斯うしも物し給はじとなむ年頃はなほ世の常に思う給へ渡り侍りつる。今は來し方行く先、うしろやすく思ひなりにて侍り」など、いと多く聞え給ふ。女房は涙ぐみて聞きおはす。斯く睦まじかるべきお前にも、常に打解けぬさまし給ひて、わりなく物づつみし・たるさまなり。この文の言葉いとうたてこはく憎げなるさまを、陸奥紙にて、年經にけれぱ、黄ばみ厚肥えたる五六枚に、さすがに香にいと深くしみたるに書き給へり。姫君は心を動かされて　いとあはれとおぼして、御額髪のやう〳〵濡れゆく御横顔ば目、あてになまめかし。

源氏は女三宮の所に居られたが院は姫宮の御方におはしけるを、中の御障子よりふと明石女御の方に渡り給へ

對に渡し聞え　紫上がつれてお歸りになりました。

此方に渡りてこそ　紫上がこちらに來てお世話なさるが宜しからう。

いとうたて　まあいやな思ひやりのないお言葉でございますこと

まして男は　まして男のお子はいくら高貴な方でも、どこにおつれ申しても仔細のない事なのですから、冗談にもそんな隔てがましい事はやかましく仰しやいますな。

御中どもにまかせて　若宮の事はあなた方の間に任せて構はずにおくのがよいのですね。

さかしらなど宣ふこそ　明石上が「さかしがり聞えさせ給ひそ」といはれた詞を受けて言ふ。

れば、人道の文箱を　えしも引隱さで、御几帳をすこし引寄せて、明石上はみづからは、几帳に半ばかくれられたはた隱れ給へり。源「若宮は驚き給へりや。時の間も戀しきわざなりけり」と聞え給へば、明石女御御息所はいらへも聞え給はねば、御上方、「對に渡し聞え給ひつ」と聞え給ふ。源「いと怪しや。紫上があなたにこの宮をらうじ奉りて、懷を更に放たずもてあつかひ・・、人やりならず衣も皆濡らして、脱ぎかへがちなめる。かろ〳〵しく、など斯く渡し奉り給ふ。此方に渡り・・てこそ見奉り給はめ」と宣へば、明石上「いとうたて思ひぐまなき御事かな。女におはしまさむ・だに、あなたにて見奉り給はむこそよく侍らめ。まして男は、限りなしと聞えさすれど、心やすく覺え給ふを、たはぶれにても、かやうに隔てがましき事なさかし・がり聞えさせ給ひそ」と聞え給ふ。源氏は打笑ひて、源「御中どもにまかせて、しらなど宣ふこそをさなけれ。

心恥かしげなる　氣づまりを感ずる程取りすました樣子をして。

ありつる箱も　さつきの文箱も慌てて隱すのも見苦しいから其儘にしてある。

なぞの箱ぞ　それはどうした箱です。

今めかしく　若返りなさつたらしい御心持が癖になつて、何か譯の分らない御冗談を時々仰しやいます。

もののあはれなりける　明石上が何か沈みこんでゐる樣子が目立つて見えるので。

かの明石の　明石の岩屋から、内々行つて居つた御祈禱の卷數やまだ果さない願などのありましたのを、源氏にもお知らせ申上げる機會があつたらお目にかけておく方がよからう、と申して送つて來たのでございますが。

卷數　願主の依頼によつて讀誦した經卷や陀羅尼等の名目や度數を書いて願主に送り届ける書付。

ついでなくて何かは　只今は箱をお開けになる機會ではございませぬ。

いつてゐるやうだ

れなくいひおとし給ふめりかし」とて、御几帳を引きやり給へれば、母屋の柱に寄りかかりて、いと清げに、心恥かしげなるさまして物し給ふ。ありつる箱も、惑ひ隱さむもさまあしければ、さておはするを、源「なぞの箱ぞ。深き心あらむ。懸想人の、長歌よみてふんじこめたる心地こそすれ」と宣へば、明石上「あな

を仰しやる

うたてや。今めかしくなり返らせ給ふめる御心ならひに、懸想人の聞きくべきや』とて侍るを、只今は、ついでなくて何かはあけさせ給はむ」と聞え給ふに、源氏の心にげにあはれなるべき有樣ぞかしとおぼして、「いかに行ひまして住み給ひにたらむ。命長くて、ここ

世の中によしある　奥ゆかしい方面の人或はたらきのある方面の人といふはで注意して見るにつけても、現世に執着してゐる間の迷ひが深いせいか、才智といふ點は認められるが、それも限りがあつて入道にはかなはない。

さも至り深く　いかにも悟つてはゐるが而も風情のあつた人ですね。

聖だち　聖者ぶつたり俗界を離れたやうな顏はしなかつたものの、内心はすつかりあの世に住してゐるやうに見えた。

かやすき身ならば　私が手輕な身分ならそつと遂つて見たいものだ。

年の積りに　年を取つて何かと世間の事が分つてゆくにつれて入道の人柄が妙に戀しく思ひ出されるから、まして夫婦の間柄では、どんなに感慨も深からう。

だから罪障も多く消滅した事だらうらの年比勤むる罪もこよなからむかし。世の中によしあるさかしき方々の人とて見るにも、この世にそみたる程の濁り深きにやあらむ、かしこりや。さも至り深く、さすがに氣色ありし人の有樣かな。聖だちこの世離れがほにもあらぬものから、下の心は、皆あらぬ世に通ひ住みわたるとこそ見えしか。まして今は心苦しきほだしもなく、思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば、忍びていと逢はまほしくこそ」と宣ふ。明石上「今はかの侍りし所をも捨てて、鳥の音聞えぬ山にとなむ聞き侍る」と聞ゆれば、源「さらばその遺言ななりな。消息は通はし給ふや。尼君いかに思ひ給ふらむ。親子の中よりも、又さるさまの契りは殊にこそ添ふべけれ」とて、源氏のうち涙ぐみ給へり。源「年の積りに、世の中の有樣を、とかく思ひ知りゆくままに、怪しく戀しく思ひ出でらるる人の御有樣なれば、深き契りの中らひは、いかにあはれならむ」な

この夢語りも　明石上はあの夢物語をお目にかけたら源氏にも思ひ當られる節があらうかと思つて。

今はとて　これを限りと思ひきつて別れては來たものの、まだ想出は殘つてゐるものでございました。

いとかしこく　これは大變立派な文章だ。まだ毫疵はしてゐないやうだ。筆蹟なども其他萬事、立派に物知りとして許される筈の人なのですが、只盛世の術に乏しかつたのです。

かの先祖のおとどは　入道の先祖の大臣は人にすぐれた稀な眞心を盡して朝廷に奉公した筈つたのだが、その間に何か失態があつて、その爲に子孫が絶えたのだ。

女子の方に　女系ではあるが、あなたがかうして居られるのだから、全く子孫がないとは、いふべきでない。これも入道の勤行の功驗でせう。

怪しくひがひがしく　明石入道を妙に理想ばかり高い人だと人も非難し、又入道自身でも自分は假初にもする行動を假初にもすると思つてゐた。併し其事は姫君の生れた時にこれも前世の因緣であつたのだと分つたが、それも心配して居つたのだ。

斯かる嬉み　入道が瑞夢を信じて居つた事。

横さまにいみじき　無實の罪に當つて憂い目を見、播磨に流浪して居つたのも、畢竟姫君一人を設ける爲であつたのだ。

これは又具して　これにはもう一つ添へてお目にかけねばならぬものがあります。源氏自身の願文の事。

今は斯く古への　もうこんなに昔の因緣話はお分りになつたのですが、紫上の深切を疎略に思召すな。

もとよりさるべき中　もと〳〵親しかるべき夫婦の仲や親子兄弟の親しみよりも他人が假初の同情をもし一言の好意でも表はすのは、並々の志ではないのです。

さこそはうはべには　繼娘が繼母の心を邪推するのである。お母樣（繼母）は表面だけは私に深切らしくしくして下さる、と功者な邪推をするのも怜悧さうには見えるが。

でありながら明石上と契つた事を反省するのである

まじき振舞をかりにてもするかなと思ひし事は、明石姫君の生れ給ひし時に、契り深く因緣が深いと分つたが思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあなたの事は、強ちには望みしなりけり、横さまにいみじき目を見、漂無理にも望んだのだ

たの事は、覺束なくこそ思ひわたりつれ、將來の

ひしも、この人一人の爲にこそありけれ、一體入道は

起しけむ、とゆかしければ、心のうちに拜みて取り給ひつ。願文を

れは又具して奉るべきもの侍り。今又聞え知らせ侍らむ」と女

姫君御には聞え給ふ。そのついでに、源「今は斯く古への事をもたど

り知り給ひぬれど、あなたの御心ばへを、おろかにおぼしなす

な。もとよりさるべき中、えさらぬ睦びよりも、横さまの

なげのあはれをもかけ、一言の心寄せあるは、おぼろげの事に

もあらず。深く懇な志をあなたに寄せて居ります

も、初めの志變らず、深く懇に思ひ聞えたるを、古への世のた

とへにも、『さこそはうはべにははぐくみげなれ』と、らう〳〵

なほあやまりても　繼母が自分に對して内心は邪怪な心を持つてゐても、さうとは氣づかずに怪我にも繼母を慕つてゐるなら、繼母も今迄とは反對に愛情深くなつて、こんなに良い子がどうして憎めようと。

たがふ節々も　相手と仲違ひはしても。

さしもあるまじき　何でもない事にかどを立てて雜癖をつけ、無愛相に人を疎外する心のあるのは、融和しにくくて。

多くはあらねど　僅かな經驗からいふのですが、樣々な人の心いきを見ますと、趣味性を初として、それ〳〵萬更ではない程度の才覺はあるやうです。

又取立てて　又特に自分の妻にと思つて眞面目に選擇しようとすると。

只誠の心の　本當に心に癖のない善い人は紫上だけでせう。

じきたどりあらむも賢きやうなれど、なほあやまりても、わが爲したの心ゆがみたらむ人をさも思ひ寄らず、うらなからむ爲は、引返しあはれに、いかで斯かるにはと、罪得がましきにも、思ひなほる事もあるべし。おぼろげの昔の世のあだならぬ人は、たがふ節々もあれど、一人々々罪なき時には、おのづから、もてなほすためしどもあるべかめり。さしもあるまじき事に、かど〳〵しく癖をつけ、愛敬なく人をもて離るる心あるは、いと打解けがたく、思ひぐまなきわざになむあるべき。多くはあらねど、人の心の、とあるさまかかる趣を見るに、故由といひ、さま〴〵に口惜しからぬ際の、心ばせあるべかめり。皆おのおの得たる方ありて、取柄がないでもないが取る所なくもあらねど、又取立ててわが後見に思ひ、まめ〳〵しく選び思はむには、その邊に入るべき女はありがたきわざになむ。只誠の心の癖なくよき事は、この對の上をのみなむ。これをぞよい人だからといおいらかなる人と・いふべかりけるとなむ思ひ侍る。

かたへの人は　紫上以外の婦人達の値打が想像出來る。

そこにこそ　あなたは少し物が分つてゐられるやうですが、紫上と仲よくして、心を合せて姫君の世話をして下さい。

宣はせねど　仰しやるまでもなく紫上の御深切はよく分つてゐますので、始終お疊致して居ります。

御覽じ知る　意に介する。目をつける。關心を持つ。

傍痛きまで　恐縮する程人がましくして下さいますので。

數ならぬ身の　數ならぬ私が死にもせずに居りますのは、姫君に取つて外聞もわるくございますが、紫上のお蔭でぼろも出さずに居るのでございます。

只この御言樣を　姫君を附ききりでお世話する事の出來ないのを心もとなく思つて、萬事があなたに任せてあるのでせう。

それも又取持ちて　あなたが取仕切つて親類に振まひなさらないから、萬事が穩かに體よくゆくので、私も安心で嬉しい。

はかなき事にても　一寸したた事も、物の分らぬ人が仲間に入ると、當人は勿論相手の人まで辛い目にあふものです。

つて又あまりひたたけて頼もしげなきも、いと口惜しや」とばかり宣ふに、かたへの人は思ひやられぬかし。源「そこにこそすこし見をも、同じ心にて物し給へ」など、忍びやかに宣ふ。明石上「宣はせねど、いとよくこの御後ぐさに聞え侍る。めざましきものになどおぼし許さざらむに、かうまで御覽じ知るべきにもあらぬを、傍痛きまで數まへ宣はすれば、却りてはまばゆくさへなむ。數ならぬ身の、さすがに消えぬは、世の聞耳もいと苦しくつつましく思う給へらるるを、罪なきさまにもて隱され奉りつつのみこそ」と聞え給へば、源「そえ・見・奉らぬ覺束なさに、讓り聞えらるるなめり。それも又取持ちて揭焉になどあらぬ御もてなしどもに、よろづの事なのめに目やすくなれば、いとなむ思ひなく嬉しき。はかなき事にて

さりや　その通りだ、諒遜して居つてよかつた。

さもいとやんごとなき　あんなにまで紫上を愛して夫人の第一位に置くお考は深まる一方のやうですこと。

宮の御方　女三宮は表面上の御待遇だけが立派で。

忝きわざ　皇女を粗末にするのであるから。

同じ筋には　女三宮も紫上も同じ血族ではいらつしやるが、女三宮の身分が一段高くいらつしやるので、一層お氣の毒です。

只かの絶え籠り　浮世を捨てて山に籠られた父入道の事を思ひやるだけが悲しく心もとない。

禍地の園に　出典不明。古歌に「耶輸多羅が禍地の園に種蒔きて有爲の都に」とあるは、ん必ず有爲の都に「耶輸多羅が禍地の園に種蒔きて有爲の都に」とあるは、禍地は仙人の住む處。この歌に「有爲の都に種蒔きて耶輸多羅が禍地の園に」とあるは必ず「一此世にて善提の種をまきつれば君がひくべき身ぞなりぬる」の歌が記してある。入道の文に「明かなる所にて又對面はありなむ」とある事をいふのであらう。

も、物・心得ずひが〳〵しき人は、たちまじらふにつけて、人の爲さへからき事ありかし。さ・なほし所なく誰も物し給ふめれば、心やすくなむ」と宣ふにつけても、さりや、よくこそ卑下しにけれ、など思ひ續け給ふ。

物・心得ず　理解がなくて

さ・なほし所なく　あなたも紫上もさうした缺點がないやうですから私も安心です

さりや　以下明石上の心中

明石上「さもいとやんごとなき御志のみまさるめるかな。げにはた人よりは殊に斯くしも具し給へる有樣の、ことわりと見え給へるこそめでたけれ。宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡り給ふ事も、えなのめならざめるは、しりうごちく」と、しりうごち聞え給ふにつけても、わが宿世はいと猛しくぞ覺え給ひける。

とはいふものの紫上は人並すぐれてかうも足りない點もなくていらつしやるのだからそれも尤もと思はれるのは結構な事です

源氏が紫上方へ

源氏が女三宮方へ

さう十分に遇つても行けないのは勿體ない事のやうに思はれます

蔭口を申上げたにつけても

高い身分の方でさへ思ふ儘にはならぬ世の中だのにやんごとなきだに、おほすさまにもあらざめる世に、まして明石上は他の婦人達の仲間入りの出來る身分ではないからまして立ちまじるべき覺えにしあらねば、すべて今は恨めしき節もなし。只かの絶え籠りにたる山住を思ひやるのみぞあはれに覺束なき。尼君もただ禍地の園に種蒔きてとやう

大將の君は　夕霧は女三宮に手が屆かないでもなかつたから。

大方の御かしづきに　一通りのお世話をする事にかこつけて。

いと若く　女三宮は若く大やうな一方で。

うへの儀式は　源氏は女三宮を表面の作法だけは おごそかに世間の例に引かれる程大事にはしてゐられるが。

をさ〳〵けざやかに　あまり際立つて臭があるやうには見えない（表面だけのことにしか見えない）の義。

若やかなる　若い美人で一圖に花やかな洒落ずきな侍女達が多く。

何事ものどやかに　萬事暢氣に構へて落着いてゐると、人の心は外から見えないもの故、身に知れぬ物思ひを持つてゐる人でも、愉快に少しも屈託のない人々と一緒に居ると、傍輩に引かれて同じやうに調子をあはせてゐるが。

ただ明暮は　始終幼稚な遊戲に熱中してゐる童女などを見て源氏は不快に思はれる事もあるが世間を一律に考へない御性質故そんな事は自由にまかせて、嘸かしさうして居たからうと大目に見て、制し改めさせようとはいふのでなさらない。

なりし一言を打嘱みて、後の世を思ひやりつつ眺め居給へり。

入道と一妻託生を誓りつつ

この姫宮　女三宮

御けはひ　女三宮の

大將の君は、女三宮が六條院にゐられるので心が動かないでもないかば、目に近くおはしますを、いとただにも覺えず、大方の御かしづきにつけて、此方には

女三宮の御方へ

さりぬべき折々に參り馴れ、おのづから御けはひ有樣も見聞き給ふに、いと若くおほどき給へる一筋にて、

夕霧が

女三宮のさま

源氏は紫宸殿に擬つて表面だけは女三宮を鄭重に取扱つてゐるのである

うへの儀式はいかめしく、世のためしにしつばかりもてかしづき奉り給へれど、をさ〳〵けざやかに物深くは見えず。女房などは大人々々しきはすくなく、若やかなるかたち人の、ひたぶるに打花やぎざればめるはいと多く、數知らぬまでつどひさぶらひつつ、物思ひなげなる御あたりとはいひながら、何事ものどやかに心しづめたるは、心のうちのあらはにしも見えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも、又更に心地ゆきげに滯りなかるべきにしもうちまじれば、かたへの人に引かれつつ、同じけはひもてなしになだらかなるを、ただ明暮は、

女三宮の事

打花やぎざればめるは好きな

何の屈託もなささうな所だが

意地ぱらないで調子を合せる意

さじうみ　正身。本人。當人。

すこしもてつけ　女三宮も少しは身を嗜むやうになられた。**げにこそ**　成程完全な女といふものは無いものだ。**靜やかなるを**　紫上は靜かさといふことを本領として目立たないやうにしてゐられるが、それでゐてさすがにひねくれたやうな所はなく、人もないがしろにするやうなことなく、品位を失はぬやうな奥ゆかしく身どりはしることをお忘れにならない方だと。

わが御北の方も　以下なほ夕霧の心中。わが妻雲居雁も情愛は深いが、相談がひがあつてそして人にすぐれた才覺などの無い人だ、毎日見てゐてもういさこさなどいふ女でないと思ふと氣がつゝんで、かうして此處に集まつてゐられる婿人達のそれ〴〵の美しさを見ると、心ひそかに愛著の念が起るのだ、ましてや女三宮は、御身分からいふと非常に高貴な方であるのに、源氏は格別御寵愛もなさらず、世間の手前だけの愛もであるのだ。

いはけたる御遊びたはぶれに心入れたる童べの有樣など、院はいと目につかず見給ふ事どもあれど、一つさまに世の中をおぼし宣はぬ御本性なれば、斯かる方をもまかせて、さこそはあらまほしからめと御覽じ許しつつ、誡め整へさせ給はず。いとよく教へ聞え給ふに、すこしもてみの御有樣ばかりをば、つけ給へり。かやうの事を、大將の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意氣色の、くも漏り出で見え聞えたる所なく、靜やかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をもやんごとなく心にくくもてなし添へ給へる事と、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。わが御北の方も、あはれとおぼす方こそ深けれ、いふかひあり、すぐれたるらう〳〵じさなど、物し給はぬ人なり、おだしきものに今はと目馴るるに、心ゆるびて、などし給へる御有樣どもの、とり〴〵にをかしきを、心一つに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御程を思ふにも、限りなく心殊なる御程に、取り分きたる御氣色にしもあらず、人目のかざりばかりにこそ、と見奉り知るに、

見奉り知るに　源氏の樣子を夕霧が見知つては。**おほけなき**　女三宮に逢はうなどいふ不料簡。

さま〴〵の御定め　女三宮の御緣談について誰はどう、彼はかうとそれ〴〵評定のあつた頃から宮に懸想し。**院にもぬざましとは**　院もけしからぬ申し分だとは思つていらつしやらないと聞いてゐたのに。**その折より**　あの當時から懇意にして居た女房の口から宮の御樣子を聞く事をせめてものはかない慰めとして居つた。女三宮もやはり紫上には壓されておいでになる。**忝くとも**　畏れ多い申しやうですが、私ならそんな物思ひはおさせ申すまいに。成程高貴な御身分に不相應な私ではありますが。

しきを、心一つに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御程を思ふにも、限りなく心殊なる御程に、取り分きたる御氣色にしもあらず、人目のかざりばかりにこそ、と見奉り知るに、ゆかしく思ひ聞え給ひけり。

衞門のかんの君も、院に常に參り、親しくさぶらひ馴れ給ひし人なれば、この宮を父御門のかしづきあがめ奉り給ひし御心おきてなど、委しく見奉りおきて、さま〴〵の御定めありし頃ほひより聞え寄り、院にもぬざましとはおぼし宣はせずと聞きしを、斯くことざまになり給へるは、いと口惜しく胸痛き心地すれば、なほえ思ひ離れず。その折より語らひつきにける女房のたよりに、御有樣などもを聞き傳ふるを、慰めに思ふぞはかなかりける。「對の上の御けはひには、なほ壓され給ひてなむ」と世の人もまねび傳ふるを聞きては、「忝くとも、さる物は思はせ奉

小侍従　女三宮の乳母子で柏木の乳母の姪。

おとどの君　源氏の事。

静かなるすまひは　かういふ閑居では、此頃は退屈で氣の紛れるやうな事が無いなあ。公私共に何にもないね。何をして暮したらよからう。

好むめるを　小弓のすきな若者らも來たのに。

ねたう出でやしぬる　夕霧は歸つたかしら、殘念な事をした。

鞠もてあそばして　河海「劉向別錄曰、蹴鞠者傳云黃帝所レ作、或曰起二戰國時一以練二武士一知二有才一也、元興寺の槻の木蔭にて天智天皇大臣鎌足入鹿などゝ御鞠ありけり一古今著聞集十一蹴鞠なり。文武天皇大寶元年にこの興始まりけるとかや」　蹴鞠は不作法な遊びですが、それでも氣のいたものでみだりがはしき事の

らざらまし。げにたぐひなき御身にこそ當らざらめ」と、常にこの小侍従といふ御ちぬしをも言ひ勵まして、世の中定めなき宿願通り出家でもされたら女三宮に取持つて下さいとを、おとどの君、もとより本意ありておぼしおきてたる方に赴き給はば、とたゆみなく思ひありきけり。

三月ばかりの空うららかなる日、六條の院に、兵部卿の宮、衞門の督など參り給へり。おとど出で給ひて、御物語などし給ふ。

源「靜かなるすまひは、この頃こそいとつれ〴〵に紛るる事なかりけれ。おほやけ私に事なしや。何わざしてかは暮すべき」などと宣ひて、

源「今朝、大將の物しつるはいづ方にぞ。いとさうざうしきを、例の小弓射させて見るべかりけり。好むめる若人どもも見えつるを、ねたう出でやしぬる」と問はせ給ふ。「大將の君は、丑寅の町に、人々あまたして、鞠もてあそばして見給ふ」

源「みだりがはしき事の、さすがに目ざめてかどかどしきぞかし。いづら、此方に」とて御消息あれば、參り給へり。若君達めく人々多かりけり。

源「鞠持たせ給へりや。誰々かと宣ひて、寢殿の東面、桐壺は若宮具し奉りて、參り給ひにし頃物しつる」と宣ふ。

「これかれ侍りつ。此方へまかでむや」と

此方へまかでむや　一同こちらへ參りませうか。「まゐらむや」とありたい所。

寢殿の東面　桐壺は今まで此處に居られたのである。

行きあひはれて　庭水が合流して廣場になつてゐる意か。「はれて」は晴れてであらう。木蔭などがなくて晴れやかな場所の意であらうか。湖月抄によれば一本に「行あひはなれて」とある由。遣水の相會する所から遠ざかつての意か。

かかり　蹴鞠場の垣に植ゑた木。三本懸、五本懸、六本懸などもあるが、四本懸を普通とし、艮(東北)に櫻、巽(東南)に柳、坤(西南)に楓、乾(西北)に松を植ゑる。但しこゝは自然木を利用したものだらう。

辨宮も　辨官でさへ怀れずに仲間入するのだもの、いくら上達部でも若い衞府司達が爲ないといふ事があるものですか。

辨官は儀式官であるから威嚴を持する爲、鞠などは遊ばないのである。

かばかりの齡にては　諸說源氏の齡と見てゐるが、それでは一口惜しく覺えしと過去にいつてゐる理由が解けなくなる。これは參會の公達の齡である。私もお前達の年齡時代に、蹴鞠が無ざまだからといふので仲間入りしないでゐるのを妙に殘念に思つた記憶がある、と解かなければならぬ。「輕しく」は「口惜しく覺えし」を修飾する。

若君達めく人々　年齡程度の人々

寢殿の東面　寢殿の東面は

この三人皆柏木の兄弟

頭の辨、兵衞の佐、大夫の君など、

風情のある鞠場を見つけて一同そこに集まつた由

由あるかかりの程を尋ねて立ち出づ。

人目に觸れない所であつた

遣水などの行きあひはれて、

大政大臣の子息達

おほきおとゞの君達、

稱年取つた人も

過ぐしたるもまだかたなり

(又)まだ一人前になつてゐない幼い人も兄弟それ〴〵に

なるも、さま〴〵に

鞠には持つてこいな日だと

暮れかかるに、風吹かずかしこき日なりと興じて、辨の君も、

我慢しきれずに仲間入をすると

えしづめず立ちまじれば、

源氏

おとど、

行儀をくづす意

「辨官もえをさめあへざめるを、上達部なりとも、若き衞府司たちは、などか亂れ給はざらむ。かばかりの齡にては、怪しく、見過ぐす、口惜しく覺えしわざなり。

だが蹴鞠の遊びはその樣が身分ある者の遊びとしては輕々しいやうに思はれる

さるはいときやう〴〵なりや、

この事のさまよ

宣ふに、

夕霧

大將もかんの君も、

柏木

庭上に(給ひ)ねて、

皆おりね・て、

美しく咲いた花の枝を折來してゐる夕映の姿はさまよく靜ならぬ花の蔭に

さまよひ給ふ夕ばえ、いと清げなり。をさ〳〵さまよく靜なら

をさ〳〵さまよく 蹴鞠はあまり巧者よくもないし静かでもないし騒がしい無作法な遊びのやうだが、それも場所がら人がらによるものであつた。

斯くはかなき こんなつまらぬ遊戯ではあるが、互に巧拙の技倆を競つて我劣らじと思つてゐるらしい顔付である中に。

御階の間 寝殿の南面の階段のある間。

人々花の上も 人々が花の事も忘れて鞠に熱中してゐるさまを源氏も女三宮も隅の勾欄まで出て眺めてゐられる。

上臈も亂れて 高官の方々もあまり一所懸命に蹴たので冠の額が少し弛んだ。

櫻 櫻襲は表白に裏赤花。

ぬ亂れごとなめれど、所がら人がらなりけり。故ある庭の木立の、いたく霞みこめたるに、色々の花もときわたる花の木ども、わづかなる萌黄の蔭に、斯くはかなき事なれど、よきあしきけぢめあるを、挑みつつ、我も劣らじと思ひがほなるなかに、衛門の督の假初に立ちまじり給へる足もとに、並ぶ人なかりけり。柏木の樣子はかたちいと清げになまめきたるさましたる人の、用意いたくしてさすがに亂りがはしき、をかしく見ゆ。御階の間に當れる櫻の蔭によりて、人々、花の上も忘れて心に入れたるを、源氏も女三宮おとど も宮も、隅のかうらんに出でて御覽ず。いとらうある心ばへどころも見えて、かず多くなりゆくに、上臈も亂れて、冠かうぶりの額すこしくつろぎたり。大將の君も、御位の程思ふこそ例ならぬ亂りがはしさかなと覺ゆれ、見る目は人よりけに若くをかしげにて、櫻の直衣のやや萎えたるに、指貫の裾つがた、すこしふくみて、氣色ばかり引きあげ給へり。かる〴〵しくも見えず。

中のしな 中段の邊に腰をおろされた。

櫻はよきて 伊行釋「吹く風よ心しあらばこの春の櫻はよきて散らさざらなむ」

例の殊に 例の如くこんな場合だからとて格別とりすますでもない女房達がゐて、御簾の外にこぼれ出てゐる色樣々の衣裳の端々や簾越しに見える透影などは。

幣袋 昔旅ゆく人は色樣々の布帛を小さく切つて袋の中に入れお き、道々の道祖神に奉つて旅の平安を祈つた。幣袋に賽へたのは雜然として規律立たないといふ意。

猫はなだよく その唐猫はまだ十分に人に馴れないのか長い綱をつけておいたのだが、その綱が物に引懸つて巻きついたのを逃げようとして引合つてゐる拍子に、御簾のそば女三宮の居られる御簾の片端が。

夕霧のさま物清げなる打解姿に、花の雪のやうに降りかかれば、夕霧が檜うち見あげて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中のしなの程に居給ひぬ。柏木かんの君續きて、柏木「花亂りがはしく散るめりや。櫻はよきてこそ」などの宣ひつつ、女三宮宮のお前の方を尻目に見れば、例の殊にをさまらぬけはひどもして、女房達の衣のつまいろ〳〵こぼれ出でたる御簾のつまより、透影かげなど、春の手向の幣袋にやと覺ゆ。御几帳どもしどけなく片隅に引寄せて引きやりつつ、女房達も近々に居るし人間味があるやうに思はれて居る所へ人げ近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫の追ひ續きて、俄に御簾のつまより走り出づるに、女房達は人々おびえ騒ぎて、「それ〳〵」とみじろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしましき心地す。猫はまだよく人にもなつかぬにや、綱いと長く附きたりけるを、物に引掛けまつはれにけるを、逃げむとひこしろふ程に、御簾のそば、いとあらはに引きあげられたるを、とみに引きなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々も、

心あわただしげ　皆慌てて居てこわがつてゐる樣子に見える。

階より西の　階の間から西二間目の東側の所であるから、何の目を遮る物もなくあらはに見込む事が出來る。

冊子のつま　天平時代の紙の巻き方もこれである。

細長　女子の細長は袿の上に著る。袿に似ておほくびが無い。

七八すんばかりぞ　身のたけに七八寸程餘つてゐる。

御ぞの裾がちに　衣裳が裾の方に長く餘つてゐて。小さいからである。

髪のかかりたる　髪の垂れ下つてゐる横顔は、何ともいへない程上品にかはいらしい。

いと飽かず　女三宮をはつきり見る事が出來なくて柏木は物足らず殘念に思つてゐる。

心あわただしげにて、ものおぢしたるけはひどもなり。凡帳の際すこし入りたるほどに、袿姿にて立ち給へる人あり。階より西の二の間の東のそばなれば、紛れ所もなく、あらはに見入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎ〳〵に、あまたかさなりたるけぢめ花やかに、冊子のつまのやうに見えて、櫻の織物の細長なるべし。御髪の、裾までけざやかに見ゆるは、絲をよりかけたるやうに靡きて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八すん許りぞ餘り給へる。御ぞの裾がちに、いとほそくささやかにて、姿つき、髪のかかり給へるそば目、いひ知らずあてにらうたげなり。夕かげなれば、さやかならず、奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。鞠に身を投ぐる若君達の、花の散るを惜しみもあへぬ氣色どもを見るとて、人々あらはを、ふともえ見つけぬなるべし。猫のいたくなけば、見返り給へる面持もてなしなど、いとおいらかにて、若くうつくしの

大將いと傍痛けれど　夕霧もそれを見付けて笑止な事だと思つてゐるが、そつと自分で御簾を直しに行くのも却つて輕率であるから。只それと氣付かせるやうに咳拂をしたので。

さるはわが心地にも　だが夕霧自身ももう暫く見て居たかつたのであるが、猫の綱を放した爲に御簾がおりたので、我知らず嘆聲が漏れた。

讃ばかりにかは　今のは誰だつたらう、多くの女房達の中で、一人目立つた袿姿ゝらしても女三宮に相違ない。女房達は唐衣に裳をつけてゐるからである。

わりなき心地の　柏木はやるせない心を慰める爲に例の唐猫を呼寄せて。

おとど御覽じおこせて　源氏が夕霧や柏木の方を御覽になり。上達部の座　上達部であるあなた方がそんな所にゐられるのは輕々しい。紫上の居られる東の對の南面。對の南の廂の方。

人やと、ふと見えたり。大將いと傍痛けれど、這ひ寄らむもなかゝるにこそ、いとかゝるゝ〳〵しければ、只心を得させて、うちしはぶきやをら引入り給ふ。さるはわが心地にもいと飽かぬ心地し給へど、猫の綱ゆるしつれば、心にもあらず打歎かる。誰ばかりにかはあらむ、こゝらのなかにしるき袿姿よりも、人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりて覺ゆ。さらぬがほにもてなしたれど、まさに目とどめじや、と大將はいとほしくおぼさる。わりなき心地の慰めに、猫をまねきよせて、かき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげに打鳴くも、なつかしく思ひよそへらるゝぞすき〳〵しきや。

おとど御覽じおこせて、「上達部の座、いとかろ〳〵しや。此方にこそ」とて、對の南面に入り給へれば、皆そなたに參り給ひぬ。宮も居なほり給ひて、御物語し給ふ。次々の殿上人は、簀

圓座　ゑんざともいふ。藁菅蘭等で渦狀に編んだ座褥。

櫃餅　蹴鞠の折に定まつて饗せられる菓子で、餅の粉にあまづらをかけて椿の葉で包んだ物。

干物　乾魚。

大將は心知りに　夕霧は事情を知つてゐるので、さては妙な事で御簾の間から見えた女三宮のお姿を柏木が思ひ出してゐるのであらうとお思ひになる。

いと端近なりつる　女三宮が端近に居られた事を柏木も一方では輕率な態度と思ふ事であらう。いやどうも。紫上にはあんな輕率な振舞はあるまいに。

斯かればこそ　これだからこそ世間で考へてゐるよりは源氏の愛情が薄いのだ。

內外の用意多からず　やはり人に對し自分にとり萬事につけて注意が足らず幼稚なのは可愛らしいやうではあるが、案がかりなものだと思つて、輕蔑の念が動く。

覺えぬ物の隙より　思ひがけずも御簾の隙から見て。

子に圓座（わらふだ）召して、わざとなく、椿餅（つばいもちひ）、梨、柑子（かうじ）やうのものども、さま〴〵に箱の蓋どもに取りまぜつつあるを、若き人々そばれ（戲れながら）取りくふ。さるべき干物（からもの）ばかりして御酒（おほむき）召上る）かはらけ參る。衞門の督は、いといたく思ひしめり（沈みこんで）て、ややもすれば、花の木に目をつけて眺めやる。大將は心知りに、怪しかりつる御簾の透影（すかげ）思ひ出づる事やあらむ、（夕霧が）と思ひ給ふ。いと（以下夕霧の心中）端近なりつる有樣を、かつはかろ〴〵しと思ふらむかし、いでや此方の御有樣の、さはあるまじかめるものを、（夕霧の心に對する源氏の疑）と思ふに、斯かればこそ世の覺えの程より（女三宮に對する源氏の）は、うち〳〵の御志ぬるきやうにはありけれ、と思ひ合せて、なほ內外（うちと）の用意多からず、いはけなきは、らうたきやうなれど、うしろめたきやうなりや、と思ひおとさる。（柏木は宰相門に從三位權）宰相の君は、よろづの罪をもをさ〴〵たどられず、覺えぬ物の隙（ひま）より、ほの（ちらりと）女三宮の姿を見たにつけても自分が以前からこがれてゐた志が達せられるのかとかにもそれと見奉りつるにも、わが昔よりの志のしるしあるべきにやと、契り嬉しき心地して、飽（あ）かずのみ覺ゆ。（源氏）院は昔物語

おほきおとどの　太政大臣がいつも私を相手にして勝負をなさつた中で、鞠にかけては私は逆もかなはなかつた。

はかなき事は　鞠のやうな小技は別に傳授もあるまいが、上手の系統はやはり遒つたものだ。今日のあなたの鞠は實にうまいものであつた。

はか〴〵しき方には　政務上の才には劣つてゐる我が家風が、仰しやいますやうに鞠の藝で傳はつて行くものとしましたとこほどの事もござりますまい。

家の風の　拾遺雜上「道眞の朝臣「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」何事でも人に勝れてゐる事は書き傳へるべきものです。あなたの鞠の名人である事などは系圖に記しておくのが面白からう。

斯かる人に　女三宮はこんな立派な方を夫にしてゐられるのだもの、どんな事があつても他に心を移されるものか。

いとこよなく　迚も近づき難い我身の程が思ひ知られるので。

しいで給ひて、（源「おほきおとどの（柏木の父）、よろづの事に立ち並びて、勝負の定めし給ひしなかに、鞠なむえ及ばずなりにし。はかなき事は、傳へあるまじけれど、物の筋は、なほこよなかりけり。いと目も及ばず、かしこうこそ見えつれ（えらいと思はれた）」と宣へば、柏木はうちほほゑみて、「はか〴〵しき方にはぬるく侍る家の風の、さしも吹き傳へ侍らむに、後の世のため、殊なる事なくこそ侍りぬべけれ」と申し給へば、（源「いやさうではない）いかでか。何事も人に殊なるけぢめをば、家の記錄）家の傳へなどに、書きとどめ入れたらむしるし傳ふべきなり。こそ興はあらめ」など、たはぶれ給ふ御（源氏の）さまの、匂（つやく）ひやかに清らなるを見奉るにも、斯かる（柏木心）人（源氏）にならひて、いかばかりの事にか心を移す人は物し給はむ、何事につけてか、（どういふ手段を取つたら自分に同情してくれる程女三宮の心を動かす事）あはれと見許し給ふ（柏木は考へて見ると）ばかりは靡かし聞ゆべき、と思ひめぐらすに、いと・こよなく御あたり遙かなるべき身の程も思ひ知らるれば、胸のみふたがりてなかで（源氏の前を）給ひぬ。

今日のやうならむ　今日のやうな暇の日を見付けて、花の散らないうちに又おいでなさいと源氏が仰しやいましたから。

宮の御事の　柏木はやはり女三宮の噂がしたいので。「一言はましけれは」とある河内本に從ふべきである。

院には　六條院はいつもあの對にばかりいらつしやるやうですねと紫上を特別に寵愛して居られるのでせう。

御門の並びなく　朱雀院の御寵愛は肩を並べるものもなく、それが癖になつていらせられたのに、今では源氏に可愛がられもするのが氣の毒です。

こなたは　紫上は普通と事情が違つて子供の時から育てられたので臆まじさも他と違ふといふだけの事のやうです。女三宮を何かにつけて大層大事にしていらつしやいますもの。

さるは　だが朱雀院の御寵愛は一通りではないものを、源氏の態度は餘り無い冷淡なものだ。「ありがたき」とは、女三宮のやうな方に對して源氏のやうな仕打は珍らしい事だの意。

夕霧は柏木と同車して大將の君一つ車にて、道の程物語し給ふ。柏木「なほ此頃のつれづれには、六條院この院に參りて紛らはすべきなりけり。『今日のやうならむ暇のひま待ちつけて、花の折過ぐさず參れ』と宣ひつるを、今月中に月のうちに、小弓持たせて參り給へ」と語らひ契る。二人はおの〳〵別るる道の程物語し給うて、宮の御事のなほ言はまほしけれ・は、柏木「院には、紫上の居られる東對なほこの對にのみ物せさせ給ふめりな。かの御・ほむ・覺えの殊なるなめりかし。女三宮この宮いかにおぼすらむ。御門の、朱雀院並びなくならはし奉り給へるに、さしもあらで、くし給ひにたらむこそ心苦しけれ」と、いはんでもいい、都にあいなくいへば、夕「たい〳〵しき事。いかでかさはあらむ。こなたは、さまとんでもない間違です かはりておほし立て給へる睦びの、けぢめばかりにこそあべかめれ。宮をばかた〳〵につけて、いとやんごとなく思ひ聞え給へるものを」と語り給へば、柏木「いで、あなかま、給へ。内々の事情は皆聞きて侍る。女三宮に氣の毒なやうな場合がり。いといとほしげなる折々あなるをや。さるは世におし

いかなれば　多くの婦人達を持つて居られる源氏が、なぜ女三宮を特別に御寵愛にならぬのだらう。

さればよ　果して柏木は女三宮に氣があるのだ。

みやま木に　紫上を本妻として他に心を移さぬ源氏も、女三宮を頼みぬ管はない。

はこ鳥　貌鳥（かほどり）ともかほよどりともいふ。八雲抄には定家卿も知らぬ鳥で、只美しい鳥だと見えてある。

殊にいはせず　女三宮の噂をさせないやうにしてしまつた。

思ふ心ありて　女三宮を得たいといふ野心があるので。

わが身かばかりにて　自分程の地位や器量で、希望の達せられない管はない。

なべたらぬ人の御覺えを。ありがたきわざなりや」といとほしがる。

柏木「いかなれば花に木づたふ鶯の櫻をわきてねぐらとはせぬ

源氏の事　女三宮の事
春の鳥の、櫻一つにとまらぬ心よ。怪しと覺ゆる事ぞかし」と、

不思議に思はれる
口ずさびにいへば、夕霧の心いで、あな、あぢきなの物扱ひや、されば

つまらぬおせつかいだ
よ、と思ふ。

紫上
夕霧「みやま木に塒定むるはこ鳥もいかでか花の色に飽くべき

女三宮
さういふ無關な事を一本調子にいふものではない
わりなき事ひたおもむきにのみやは」といらへて、煩はしけれ

うるさいから
ば、殊にいはせずなりぬ。他事にいひ紛らはして、おの〳〵別

二人は
れぬ。

太政大臣
柏木「かんの君は、なほおほいどのの東の對に、獨住にてぞ物し給ひ

獨身住
ける。思ふ心ありて、年頃斯かるすまひをするに、人やりなら

身から出た錆ながら
ず、さう〳〵しく心細き折々あれど、わが身かばかりにて、な

柏木の心
どか思ふ事かなはざらむ、とのみ心驕り・するに、この夕べよ

誤寫の夕方から

くしいたく　ひどく滅入りこんで。

いかならむ折に　何かの機会に又あの時くらゐにでももちなほりと宮のお姿を見たいものだ、何をしようと人目につかぬ身分の(女三宮の)は、一寸しても造作なく物忌や方違の外出が手軽に出来るから、自然何とかして機会を見付けて出す事もあらうが、自分はさうはいかぬ。

思ひやる方なく　煩悶の慰めやうがなくて。

深き窓の内に　奥深い住ひの女三宮に、どんな手段を取つたら自分が深く懸してゐるといふ事が出來よう。だけでも通ずる事が出來よう。

一日の風に　先達の風に誘はれて御垣が原に分け入りましたが女三宮はどんなにか一入私をお見下げ遊ばされた事でせう。御垣が原は六條院の御垣の中を原に見たてていつたまでのこと。

あやなく今日を　伊勢物語古今戀一「見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日やながめ暮さむ」

よそに見ての歌　よそながら女三宮を拜したばかりでは逢ひ得ぬ歎きは増すばかりでございますがさうした苦しい思ひをしながらも諦めきれないで、今もあの夕方のお姿が戀しく思はれます。「なげき」は「歎き」の「き」に「木」をきかして「折る」とか「繁る」とかいふ語を點出したものである。

心苦しげなる　氣の毒な柏木の樣子を見ては、知らぬふりも出來ずに媒する氣にもならうかと自分で自分の心が分りませぬ。（今の私の心もちからおもふと取りもつ氣になるかも知れぬ。）

見もせぬ　柏木の文中「見ずもあらず見もせぬ」の引歌のある所を女三宮が讀んで。

あさましかりつる　餘りにも不注意であつた御簾の端の事を。

大將の　夕霧が、かやう〳〵して女三宮を見たと源氏に申上げたら、源氏はどんなに自分の不注意を咎められる事だらう。

常よりも　女三宮がいつもより默りこんで居られるので小侍從は異ざめて。

一日は　先達の鞠の日には、私はあなたのいらつしやる事を知つてゐましたが、見て見ぬ風をしてゐましたのでした。けしからぬと思つたのでした。「宮にお逢はせ申さなかつたのに、見ずもあらずなどと、女三宮にお目にかかつたやうな事を仰しやるのは如何いふ意味です。何といふ言ひがかりをなさるのでせうの意。柏木が女三宮を見たことを侍從は知らなかつたので、こんな返事を書いたのである。

りくしいたく、物思はしくて、いかならむ折に、又さばかりにても、ほのかなる御有樣をだに見む、ともかくもかき紛れたる際の人こそ、假初にも、たはやすき物忌方違の移ろひもかろしきに、あのづから、ともかくも物の隙を窺ひつくるやうもあれ、など、思ひやる方なく、深き窓の内に、何ばかりの事につけてか、斯く深き心ありけりとだに知らせ奉るべき、と胸痛くいぶせければ、小侍從がり、例の文やり給ひて、

風に誘はれて、御垣が原を分け入りてはべりしに、いとど、いかに見おとし給ひけむ。その夕べより、亂り心地かきくらし、あやなく今日をながめ暮し侍る」など書きて、

よそに見て折らぬなげきは繁れども名殘戀しき花の夕影

とあれど、侍從は一日の心も知らねば、只世の常のながめにこそはと思ふ。

お前に人繁からぬ程なれば、この文をもて參りて、

この人の、斯くのみ忘れぬものに言間ひ物し給ふこそ煩はしく侍れ。心苦しげなる有樣も、見給へあまる心もや添ひ侍らむと、みづからの心ながら知りがたくなむ」と、打笑ひて聞ゆれば、女三「いとうたてある事をもいふかな」と、何心もなげに宣うて、文廣げたるを御覽ず。「見もせぬ」といひたる所を、あさましかりし御簾のつまをおぼし合せらるるに、御おもて赤みて、「大將に見え給ふなる。

おとどの、さばかりな

いはけなき御有樣なめれば、おのづから取りはづして見奉るやうもありなむ」と、誡め聞え給ふをおぼし出づるに、大將の、さる事・ありしと語り聞えたらむ時、いかにあばめ給はむと、人の見奉りけむ事をばおぼさで、まづ憚り聞え給ふ心の内ぞをさなかりける。常よりも御・・さしいらへなければ、すさまじく、强ひて聞ゆべき事にもあらねば、引き忍びて、例の書く。「一日はつれなしがほをなむ。めざましうと許し聞えざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけ〳〵しや」と、はや

いまさらに　女三宮に御懸想なさつた所でどうせ叶はぬ戀ですもの、今更顏色にもお出しなさいますな。「いろ」は櫻の緣語。

と遠慮に
りかに走り書きて、

小侍從
「いまさらにいろにないでそ山櫻およばぬ枝に心かけきと
かひなき事を」

とあり。

納本

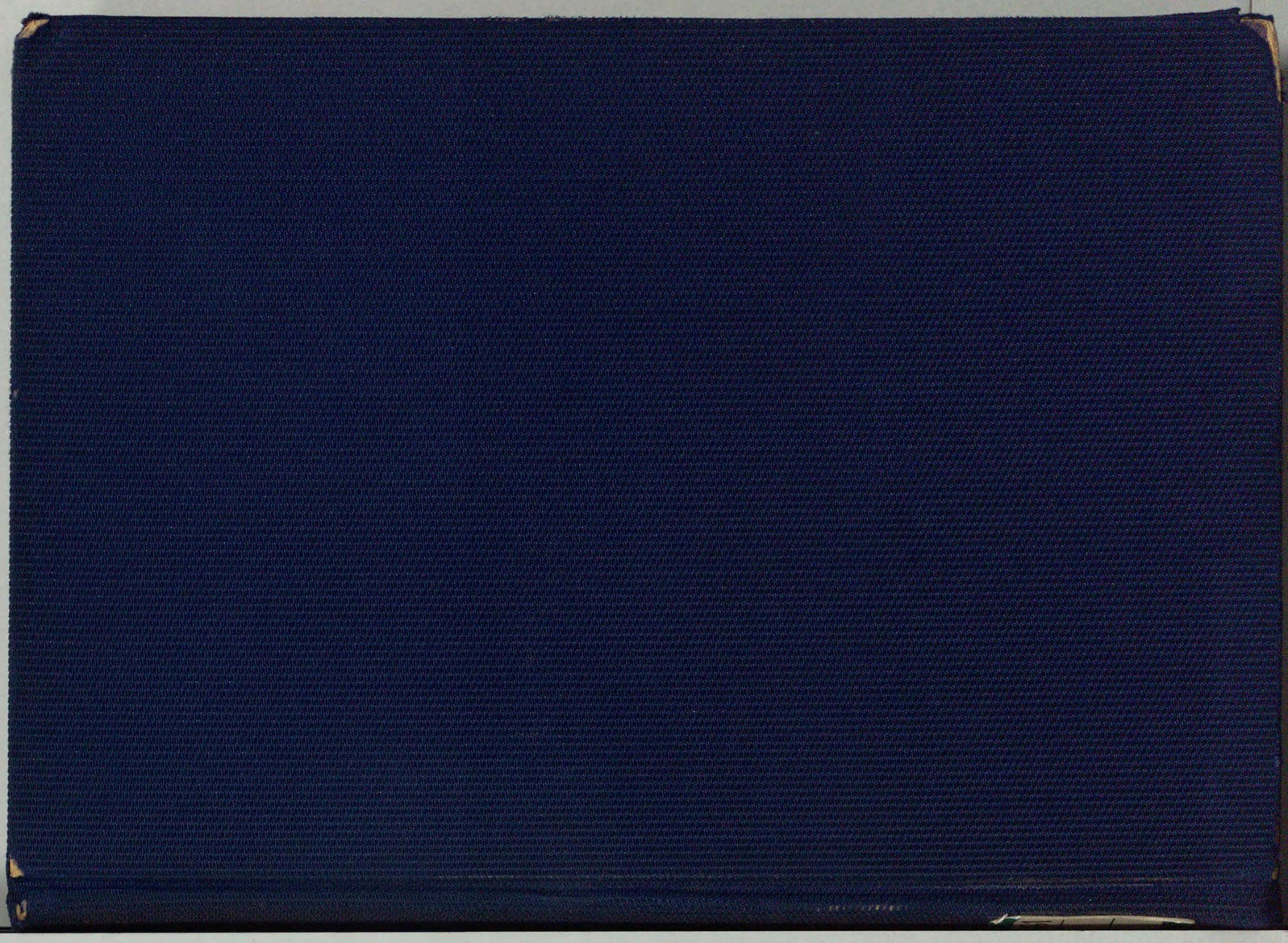
昭和二十七年六月二十日　印刷
昭和二十七年六月二十五日　發行

對校　源氏物語新釋　卷三
都内定価　六〇〇円
地方定価　六二〇円

著者　吉澤義則

發行者　下中彌三郎
東京都千代田區四番町四

印刷者　塩原康人
東京都千代田區四番町四

株式會社　平凡社
東京都千代田區四番町四
電話九段(33)四八八二——四番
四八九五——六番

東京・神田神保町三の一〇　共立社印刷所